様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月 １２ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２０１０

研究課題名（和文）近代満洲における技術導入と社会変容:在地社会と植民社会の相互作用に着目して

研究課題名（英文）Technology introduction and social change in modern Manchuria

研究代表者
上田　貴子（Ueda, Takako）

近畿大学・文芸学部・教授

研究者番号：００４１１６５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国東北地域で展開した近代化過程を分析した。中華文化圏の周縁部に位置し、少数民族文化が混在する特殊な状況下で、周辺列強による植民地化の動きも伴う特殊な状況にあった。列強の企業による近代的技術の導入が近代満洲の重要な近代化要因とされるが、地域社会も独自の近代化を進めており、本研究ではその相互作用に注目した。そこで明らかになったことは、先進的技術が必ずしも受け入れられるとは限らず、むしろ有効であったのは地域社会の知見を活かした技術であった。植民者のもたらしたものだけではなく地域社会の知見も近代化にとっては重要な要素であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在の中国東北地域が、少数民族社会を基層に持ちつつ、華北型の漢人社会の植民、日本の近代植民地勢力による接収、中国国民党されには共産党による接収と度重なる植民・接収を経て形成された地域である。従来の植民地研究では列強の植民地形成だけに焦点を当ててきたが、長期にわたる視点でとらえることで、外来勢力は新たな技術をもたらすが、それだけでは適応できず、先住の地域社会の知見を取り入れ統合されるなかで新たな地域社会が形成されるという理解が得られ、近代的植民地経験もその一過程と考えられる。

研究成果の概要（英文）：This project observed the modernization process in Manchuria. This region was the periphery in the Chinese cultural sphere, made up of minority ethnic groups, such as Mongolian, Manchurian, and others. Because of the periphery, significant external powers, especially Japan and Russia, tried to profit from the region and tried to colonize Manchuria. It has been said that the enterprises of those external powers brought in modern technology, promoted industrial formation, and developed the region. However, local society itself also has managed to make progress into modernization. We focused on the integration between colonial and local modernizations. This project found that these externally-introduced technologies were not always smoothly accepted. The technologies would eventually be accepted only after understanding, adopting, and integrating local knowledge. That is, not only advanced technology but also local deep knowledge contributed to modernization in Manchuria.

研究分野：中国史

キーワード：中国東北　医療　畜産業　林業　少数民族　技術導入　人口管理　植民者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

『「満洲」の成立』〔安冨歩・深尾葉子編、2009〕は、コミュニケーション（交通・運輸・金融・移民）のポジティブフィードバックによって森林が消尽し、未開の荒野が開発されていくことで近代満洲が成立したことを社会生態史的視点から叙述し、歴史学・人類学・社会学に大きな衝撃を与えた。このなかで在地社会の在り方にも影響があることは言及されているが、社会そのものの分析は課題として残されている。研究代表者は『「満洲」の成立』第 10 章で奉天都市社会の一部として商工業者が長城以南(関内)の中国伝統社会と異なる社会意識を持つにいたることを見出した。伝統的な中国社会とは違う在地社会が形成されつつあるという仮説を得て、その形成メカニズムを明らかにするには、より学際的な共同研究による多角的な分析が必要であると痛感した。

近代満洲社会は移民(関内漢人・朝鮮人・諸外国人)の流入によって 1894 年日清戦争時で約 500 万人程度の人口が 1945 年には約 4500 万人(日本人約 200 万人朝鮮人約 230 万人を含む)に膨張し、近代以前から居住する漢人・モンゴル人・満洲人をベースに流入した関内漢人を加えた在地社会と外国からの流入者による植民社会が、50 年間で同時に形成された〔上田貴子「第 2 部満洲総説」『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』2008〕。ちなみに在地社会は被植民者社会でなく、独自の内在的発展の指向性を有している点を注目したい。

近代満洲社会形成の牽引車として機能したのが近代的テクノロジーである。在地行政・植民地行政それぞれの導入支援とともに、在地社会と植民社会の協力・競争などの相互作用のなかで、生活向上や経済効果がインセンティブとして働き、加速度的に近代化がすすみ、独自な近代満洲社会が形成されたと考えられる。このような近代満洲の形成過程を明らかにするためには、在地社会と植民社会双方から分析し、テクノロジーをめぐる両者の相互関係を検討する必要がある。

２．研究の目的

本共同研究では、日清戦争後の清政府の近代テクノロジー導入から日中戦争後の接収までの約 50 年間のタイムスパンでテクノロジーの導入・普及・継承プロセスを総合的に明らかにし、近代満洲の成立をより具体的に把握する。導入から継承までのプロセスを検討することで、その担い手の交代や広がりに注目し、一方的な開発や支配ではない、テクノロジーそのものが近代満洲空間で果たした役割を検証する。このプロセスは社会をとりまく自然環境・生活環境・経済構造をも変え、ひいては社会観・衛生観・生業観・自然観の変化を引き起こすことから、テクノロジーの導入・普及・継承を検討することは社会意識の客観的分析に不可欠である。

なおこの視点は植民地化を正当化するものではないことは言うまでもない。また近代満洲は台湾や朝鮮のような植民地近代と似ているが、研究代表者はこれまで中国史研究者としてこの地域の独自性を研究してきており、植民地近代という視点はとらない。

３．研究の方法

農業・医療・インフラ整備・行政の各分野におけるテクノロジー導入・普及・継承過程の解明に取り組んだ。テクノロジーの導入にあたって、植民者と在地社会との間にどのような相互作用があったのか、認識の対立や知見の交流があったのかという点を分析した。

具体的には各自で以下のテーマについて検討を行った。

上田貴子は人口移動の管理について中国社会と日本社会の認識の違いを整理し、「満洲国」において中国側の管理技術と日本側の管理技術の接合を検討した。西澤泰彦は 1911 年のペストの流行時に、中国人社会も視野にいれた満鉄の健康・衛生の管理について検討した。研究協力者の財吉拉胡は満洲医科大学を中心に鉄道沿線から奥地へと巡回診療を分析した。キンウィは在地社会と植民者との間の畜産業に対する理解の違いを検討した。小都は外来植民者が中心にある「満洲国」の組織が畜産行政において、在地と植民者の理解の違いにどのような対応しようとしたのかを検討した。永井リサは、林業技術者に焦点をあて、林業技術の変遷とともに、日本式の技術が戦後の東北地域林業技術に残した影響までを視野にいれて調査を行った。佐藤量は技術者の「近代満洲」経験を戦後日本のなかで再考をおこなった。「近代満洲」は、中国という Nation が占有していない空間に様々な民族の存在を発見していった場でもあった。坂部晶子は非農耕民を「近代満洲」にそして中華人民共和国に包摂する過程を分析した。蘭信三は、近代満洲をどのように理解するべきか、日本における満洲経験の認識、同時期の他地域と比較しながら検討し、この研究から得られた知見と次なる問題の整理をおこなった。

４．研究成果

2017 年度 2018 年度 2019 年度は内外の研究者との交流を重ねつつ、これまでの知見を再確認しながら、各自の研究をすすめた。2020 年度以降は成果をまとめるためにオンラインでの研究会を重ねた。2021 年は東アジア日本研究者協議会の第 5 回国際学術会議のパネル報告にて成果を口頭発表した。それをふまえて第 3 回研究会にて研究成果の出版を計画するに至った。

そこで公開する予定の内容は以下のとおりである。上田貴子は、1910 年から 1911 年の満洲におけるペスト大流行にあたって苦力の移動をコントロールすることに躍起になる満鉄と東三省総督その両者の違いから書き起こし、民国期の清郷という独特の管理方法にみられる在地政府の管理観と日本の管理観の違いがあること、在地政府の人間管理手法を導入が重要であったことを明らかにした。西澤泰彦は、1911 年のペストの流行を目の当たりにするなかで、満鉄がいかに外地での健康・衛生の管理について向き合おうとし、植民都市大連における近代医療の象徴として作りあげた満鉄大連医院本館が在地社会を意識していたことを明らかにした。財吉拉胡は、満洲医科大学を中心に鉄道沿線から奥地へと巡回診療がなされたが、そこで提供された医療の在地社会への影響と限界を論じ、植民者のもたらしたものを契機とした在地のアップデートのなかには伝統医療も存在意義を残している。キンウィは在地社会と植民者との間の畜産業に対する理解の違いを検討し、その導入においてモンゴル人にとってなじみのある預託という制度を用いて品種改良をした羊の導入がされたことを明らかにした。小都晶子は、畜産については経験の浅い外来植民者が中心にある「満洲国」の組織が獣疫の防禦についてとりくむにあたって植民者の認識がアップデートされていく点を明らかにした。永井リサは、従来、山東からの出稼ぎ労働者に担われていた林業であったが、ここに鴨緑江伐木公司などの日本企業が入ることで、日本式の林業技術が導入された。しかし、それはそのままでは「満洲」にはなじまず、改良がなされ、「満洲国」期には日本へ実習生が派遣され、日本式の技術が戦後の東北地域林業技術に影響を残した点をとらえた。佐藤量は、技術者の「近代満洲」経験を戦後日本のなかで再考し、改革開放後の中国との再度の接合に影響を与えた点をとらえた。する試みである。坂部晶子は植民者が中国という Nation が占有していない空間に様々な民族の存在を発見していったこと、それが社会主義中国の時代に、在地社会側に民族として申請させ、認定していくことになったことを明らかにした。

上記の各自の研究成果から総合して、本研究課題が総体として到達した成果の主な要点は以下のとおりである。植民地を対象とした研究では、植民地権力の形成が第一に分析されてきた。植民地は権力や機構だけで成り立つものではなく、支配を支えた要素として、近代的な技術の存在も重要である。そして、後世、その技術だけを切り取って、植民地支配がその地の近代化に寄与したと指摘されることも多い。だが、導入されても予想した成果があがらない技術、普及しない技術も存在する。開発された条件下では効率的で優れた技術も、違う条件下では機能しないこともあり得る。その地域の環境をよく理解する在地社会のほうが、外来者よりも合理的な技術を選択できる。この研究では、在地社会のもつ経験知と、外来者がもたらす知見との相互作用のなかで、紆余曲折を経て技術の導入が試みられ、変化し、その過程で在地・外来双方のエージェンシー自体も変化していく過程を分析し、医療・人流・畜産・林業にまつわる技術をとりあげ、近代化が進むなかで導入された技術は単線的に発展したわけではなかったことを明らかにした。また、歴史学を手法とした分担者の研究成果とともに、社会学・人類学を手法とする分担者によって、植民者のまなざしが在地社会の自己認識にも影響を与えるおことが明らかにされた。

本プロジェクトでは、中国・台湾・アメリカの若手研究者との交流も盛んに行った。彼等は 2022 年現在、各地での大学教員として研究に従事しており、本プロジェクトの課題を共有してくれている。今後の課題は、「近代満洲」という経験を、20 世紀とは違ってくる、北東アジアの国際情勢のなかで、より普遍的でかつ共有できる歴史経験にするために、議論を重ねていくことである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 上田貴子	４．巻 32
２．論文標題 まだなにものでもない長春を垣間見る－『長春実業新聞』の1922年10月1日から12月31日	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京大学大学院情報学環社会情報研究センターニュース	６．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上田貴子・坂部晶子・齋藤一晴・原田忠直	４．巻 144
２．論文標題 漫画『フイチンさん』をとおしてみるハルピンの情景、満洲国、戦後日中関係	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現代と文化：日本福祉大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 西澤泰彦	４．巻 266
２．論文標題 東アジアにおける日本の支配と建築	５．発行年 2022年
３．雑誌名 上水流久彦編『大日本帝国期の建築物が語る近代史 ： 過去・現在・未来』アジア遊学	６．最初と最後の頁 8-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂部晶子	４．巻 32
２．論文標題 「満洲」の記憶と戦後日本社会、終わらない近代の帰結について――佐藤量、菅野智博、湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、2020年）を読む	５．発行年 2020年
３．雑誌名 近現代東北アジア地域史研究会NewsLetter	６．最初と最後の頁 127-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂部晶子	4．巻 3413
2．論文標題 複数の帝国の狭間におかれた経験を照射する（許雪姫著『離散と回帰――「満洲国」の台湾人の記録』（羽田朝子・殷晴・杉本史子訳、東方書店、2021年）書評）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 週刊読書人	6．最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永井リサ	4．巻 35
2．論文標題 九州帝国大学農学部資料整理を契機として	5．発行年 2021年
3．雑誌名 九州大学総合研究博物館ニュース	6．最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/27454	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 財吉拉胡	4．巻 23
2．論文標題 「満洲国」以前の東部内モンゴルにおける近代日本の医事衛生調査	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東北アジア研究	6．最初と最後の頁 41-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 キン　ウィ	4．巻 21
2．論文標題 「満蒙」における日本の牧羊調査 ： 軍部と満鉄を中心に	5．発行年 2019年
3．雑誌名 都市文化研究	6．最初と最後の頁 40～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20190418-012	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 穐山新	4．巻 44
2．論文標題 書評 上田貴子著『奉天の近代』と「公共空間」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代中国研究	6．最初と最後の頁 97-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂部晶子	4．巻 1
2．論文標題 少数民族地域に残る記憶の地層――中国内モンゴル自治区フルンボイルから	5．発行年 2020年
3．雑誌名 6‐19世紀東アジア国際秩序の成立と変容の研究――国際シンポジウム報告書	6．最初と最後の頁 223-231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 キン　ウィ	4．巻 第21号
2．論文標題 「満蒙」における日本の牧羊調査―軍部と満鉄を中心に―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 都市文化研究	6．最初と最後の頁 40-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 キンウィ	4．巻 第29号
2．論文標題 『畜産満洲』―所蔵と記事目録―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター	6．最初と最後の頁 26-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 上田貴子	4．巻 第29号
2．論文標題 シンポジウム趣旨説明	5．発行年 2017年
3．雑誌名 近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター	6．最初と最後の頁 61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 キンウィ	4．巻 第29号
2．論文標題 満洲綿羊改良事業について―開始時期・事業主体に注目して―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター	6．最初と最後の頁 62-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 湯川真樹江	4．巻 第29号
2．論文標題 朝鮮人農民による栽培品種の変更―満洲国交易場価格と農事指導に着目して―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター	6．最初と最後の頁 65-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　1件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 上田貴子
2．発表標題 移動する人間を管理するまなざし―清朝期、民国期、満洲国期を比較して―
3．学会等名 近世史フォーラム11月例会
4．発表年 2021年

１．発表者名 永井リサ
２．発表標題 「満洲国」林業遺産の継承と断絶
３．学会等名 地理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 佐藤量
２．発表標題 日本と中国の同窓会の異同について
３．学会等名 中国人留学生史研究会第88回例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐藤量
２．発表標題 コメント「満洲国をめぐるスポーツと社会について」
３．学会等名 公開シンポジウム「満洲国とスポーツ」
４．発表年 2022年

１．発表者名 上田貴子
２．発表標題 試論張氏政権下的城市開発与京奉鉄路的作用
３．学会等名 シンポジウム『張氏父子与近代東北鉄路建設暨馮徳麟生平事績研究学術研討会』（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 西澤泰彦
２．発表標題 満鉄大連医院本館が持つ社会的意味
３．学会等名 第5回東アジア日本研究者協議会国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小都晶子
２．発表標題 「満洲国」の畜産政策―防疫を中心に―
３．学会等名 第5回東アジア日本研究者協議会国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 財吉拉胡
２．発表標題 巡回診療の地政学―近代日本が内モンゴル東部で実施した巡回診療を中心に―
３．学会等名 第5回東アジア日本研究者協議会国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 坂部晶子
２．発表標題 帝国の周辺領域における少数民族の記憶の地層―フルンボイル地域の近代から―
３．学会等名 第5回東アジア日本研究者協議会国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 キン　ウィ
２．発表標題 「満洲」綿羊改良事業における預託制度の一考察
３．学会等名 第88回社会経済史学会全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 キン　ウィ
２．発表標題 「満洲国」産羊毛の流通及び輸出に関する考察
３．学会等名 日本モンゴル文化学会第二回夏季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 西澤泰彦
２．発表標題 1905-45年の中国東北地方における都市建設と建築:瀋陽と長春の事例
３．学会等名 International symposium on Northeast Asian Urban Studies（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 坂部　晶子
２．発表標題 Memory of the harm made by the war in a Japan region; the construction of the memorial to the Chinese victims in the city of Mizunami in the Gifu prefecture
３．学会等名 Workshop: "Interaction models in East Asia in the 20-21 centuries"（サンクトペテルブルク大学）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 坂部　晶子
２．発表標題 少数民族地域に残る記憶の地層――中国内モンゴル自治区フルンボイルから
３．学会等名 国際シンポジウム「16－19世紀東アジア国際秩序の成立と変容の研究――日本・朝鮮・中国(明清)三国の比較という視点」（島根県立大学）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 坂部　晶子
２．発表標題 About Construction of Underground Military Factories in the Last Wartime in the Gifu Prefecture and the Project to Return Bones of Chinese Laborers
３．学会等名 Symposium:" Interaction models in East Asia in the 20 - 21 centuries"（サンクトペテルブルク大学）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 永井　リサ
２．発表標題 中国近代における獣骨肥料供給地としての屠畜場の成立について―天津屠畜場を中心に―
３．学会等名 日本土壌肥料学会神奈川大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 キン　ウィ
２．発表標題 モンゴル牧畜社会における預託制度の変容
３．学会等名 日本モンゴル文化学会第1回冬季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 上田　貴子
２．発表標題 日本人の見た奉天、中国人の生きた奉天
３．学会等名 東洋史研究会大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 歴史街道編集部	４．発行年 2022年
２．出版社 ＰＨＰ研究所	５．総ページ数 216
３．書名 満洲国と日中戦争の真実	

１．著者名 張連興主編	４．発行年 2021年
２．出版社 遼寧人民出版社	５．総ページ数 393
３．書名 張氏父子与近代東北鉄路建設	

１．著者名 蘭 信三、松田利彦、李 洪章、原 佑介、坂部 晶子、八尾 祥平	４．発行年 2022年
２．出版社 みずき書林	５．総ページ数 728
３．書名 帝国のはざまを生きる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://www.facebook.com/groups/390164718485176/?ref=bookmarks

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小都　晶子 (Ozu Akiko) (00533671)	摂南大学・外国語学部・講師 (34428)	
研究分担者	猪股　祐介 (Inomata Yusuke) (20513245)	特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員 (95401)	
研究分担者	佐藤　量 (Sato Ryo) (20587753)	立命館大学・先端総合学術研究科・非常勤講師 (34315)	
研究分担者	蘭　信三 (Araragi Shinzo) (30159503)	大和大学・社会学部・教授 (34453)	
研究分担者	坂部　晶子 (Sakabe Shoko) (60433372)	名古屋大学・人文学研究科・准教授 (13901)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	永井　リサ (Nagai Risa) (60615219)	帝京大学・経済学部・講師 (32643)	
研究分担者	西澤　泰彦 (Nishizawa Yasuhiko) (80242915)	名古屋大学・環境学研究科・教授 (13901)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	財吉拉胡 (Buyanchugla Saijirahu)	内蒙古民族大学・教授	
研究協力者	キン　ウィ (Jin Wet)	赤峰学院・講師	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 近代満洲をめぐる有機物の循環～草原・森林・農地そして都市へ～	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 モノと技術の伝播と普及	開催年 2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	内蒙古民族大学蒙医薬学院	赤峰学院	澳門科学技術大学	
台湾	国立中興大学	中央研究院近代史研究所		
中国	中山大学中山医学院人文中心			